學會彙報

人文學研究室

△國史學會

十月廿八日(水)午後三時於第八教室
眞盛上人の研究　西澤　卽信君
源實朝の信仰　藤島　達朗君
來會者　德重教授以下廿六名
十二月六日(日)
史蹟踏査
○方面—滋賀縣坂本地方
○見學箇所—叡山文庫、延曆寺、日吉神社、西教寺、山口圓光教授家藏文書
○參加者　山口、德重二教授、不破學士以下學生廿三名
十二月九日(水)午後三時於會議室
古代人の精神生活　藤島　清文君
海人部族について　不破　幹雄君
來會者　德重教授以下廿九名

△國文學會

十月廿七日(火)自午後三時於會議室
戸田茂睡の研究　深田　清君
十一月一日　會報第三號(昭和六年三月卒業論文紀要其他所載)發刊
十一月二日(月)秋季親睦會、ところ—清瀧
十一月十三日(金)自午後三時於圖書館樓上
宗祇法師と其の連歌學　渡邊　浩雄君
平賀源內　前田　謹君
十二月二日(水)自午後三時於會議室
幸若舞について　田中　滿雄君
十二月十日(木)自午後三時於會議室
上田秋成の傳記と其の和歌　天日嶽泰憲君
伊藤左千夫と當時の歌壇　本間　唯一君

△東洋史學會

十月廿三日(金)於會議室
金代の佛教　野上　俊靜君

十一月廿九日(日)
內藤湖南博士の恭仁莊を加茂に見學す、鴛淵、德重二教授以下參加者十五名。
十二月十二日(土)於會議室
漢書の烈女傳について　松浦教授

△支那文學讀書會

十月六日(火)於會議室
甲骨文字研究史　上村幸次君
十一月四日(木)於會議室
支那道廟につきて　浦川教授

佛教學研究室

△眞宗學會

十二月四日(金)午後三時於會議室
能所の取扱に就て　禿諦住氏

△佛教學會

十二月三日(木)午後三時於會議室
救濟の體驗と空の意義　稻津教授

哲學研究室

△哲學の會

□十二月十一日午後六時より應接室に於いて例會を開く
講師　和歌山高商教授　須田國太郎氏
演題　日本畫壇に於ける洋畫の位置に就て

宗教學會

□昭和六年十一月一日に創立された宗教學會は、獨自の研究方針を以て、第一歩を踏み出した。卽ち豫め決定された討議主題について、各會員は、それ〴〵研究を行ひ、以て研究會に臨むのである。そこでは、豫め指定された一會員の簡單なる研究發表が行はれ、それを中心にして、討議が交はされる。討議の結果は記錄され、更に、その結果によつて、發展的に、次の研究會が持たれると云ふ方法である。

□第一回研究會開催　十一月三十日於本學會議室
一、參加員　鈴木貞太郎、阿部現亮、西谷啓治、日野眞澄、横川顯正、杉平顗智、重永潜、岩倉政治、本間唯一、林修、大和彰言、石浦義光、藤原三雄、刀根隆信、(正會員岩井勝次郎教授及び於川僧天は缺席)

一、研究主題「親鸞に於ける人間觀」

主題提出者岩倉「親鸞に於ける人間觀」の性格を當時の社會の歷史的性格を以て說明すべきことを提唱す。討議の結果その論旨未だ不備なることを認め、更に「人間觀」一般のより深き研究を要すると決す。

一、次回の研究主題「再び人間觀に就いて」

―前主題提出者への批判的立場より―

開催期日　一月十七日の豫定　（岩倉記）

社會學會

□十二月十五日（火）午後三時より哲學研究室に於いて例會を開く

藝術社會學への前提　成瀨配君（松原記）

教育學會

□十二月十四日第三回例會を開催す

デユイーの教育學に就いて　龍山　義禀君

□一月十五、十六日　京都女子師範學校附屬小學校の研究發表會並びに研究授業を大西教授引卒の下に見學す。（沼口記）

新刊紹介

室町時代小歌集

從來國文學史に於て中世と言へば、直ちに暗黑時代なる詞を聯想する程であつた。そしてまたその事は、彼の華やかな王朝時代や、爛熟せる德川時代の文學と對比するとき、あながち否定出來ない事でもあつた。其處に未だ開拓の手で入れられなかつた點からも、また資料の整備しない點から言つても。然し近時次第に學界の趨勢は此の暗黑の世界に一段と曙光を投げかけたかの觀がある。先頃『國語と國文學』が中世文學研究の爲に尨大なる特輯號を出した如きもその傾向の一半を示すものと言ふべきであらう。斯かる學界の機運に際して本書の出版された事は學界を益する事決して些少ではあるまい。

本書は目次にも示す通り（一）原本を玻璃版にせる部分（一―五〇頁）（二）原本を活字にせる部分（五一―九五頁）（三）「室町時代小歌集」に就いて、と言ふ著者の論說（九七―一七三頁）（四）索引（十五頁）の四部分からなつてゐる。

『この「小歌集」に收められてゐる歌數は、凡べて二百十九首（但し一首重複）、「閑吟集」より稍少ないが、共在するもの三十一首を除いて新たに獲たもの百八十七首を數へる。』『書寫の年代を明かにしないが、少くも慶長は下らぬであらう。』『夙く題